

果樹農家のみなさまへ、時季ごとの耳より情報をお届けします



## 5月中下旬の降雨によるべと病発生に注意



- 近年、5月の降水量が少ない傾向にあり、中下旬に少量でも降雨に遭うとべと病が発生します。
- この時期は感染経路となるブドウの葉裏や花穂表面にある気孔が発達しています。やや低い温度条件がべと病の生育適温ですので、降雨に含まれるべと病菌伝染源の遊走子は容易に樹体内に侵入します。
- べと病が開花期前後の花穂に及ぶと、今年1年を棒に振ることになります。5月上旬にドーシャスフロアブル2,000倍またはアリエッティ水和剤800倍、中旬と下旬にはオーソサイド水和剤800倍をそれぞれ散布しましょう。
- 天候不順が予想される場合やすでにべと病の発生が認められた場合には、ジャストフィットフロアブル5,000倍を丁寧に散布しましょう。



写真 開花後の幼果に発生したべと病



## アグレプト液剤による無核化率向上



- ブドウの無核栽培においてジベレリン処理のみでは種子が抜けきれず、安定して種なしにならない場合があります。
- このような際にアグレプト液剤1,000倍液を用いると無核化率を100%近くまで向上出来ます(図)。本剤はモモせん孔細菌病の防除薬剤としても使用されています。
- 処理時期は、満開約14日前に効果が最も高く、それより処理が早くても遅くても効果は低下します。
- 散布処理と浸漬処理は同様の効果が得られますが、散布処理では花穂に十分薬液が付着するように御留意願います。

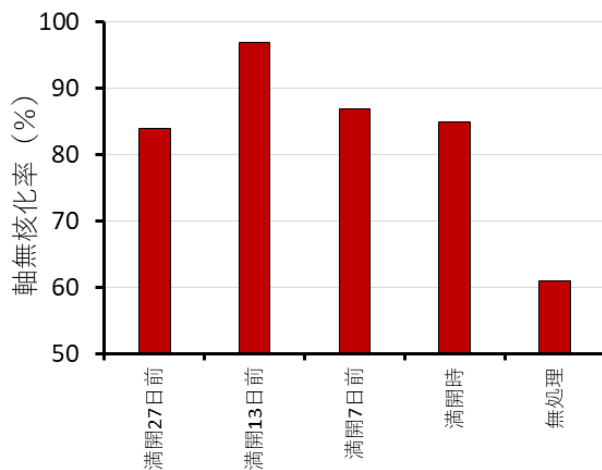


図. アグレプト液剤の処理時期の違いが無核化率に及ぼす影響(巨峰、山梨果試成果情報)